

革命から第一帝政時代の金融界とその周辺

——一九世紀前半における「銀行家」の社会的地位と文学空間(二)——

柏 木 治

はじめに

前稿^①では、小説の題材として頻繁に使われるのに、文学研究においてはさほど深く言及されることのない銀行家の実態を探るにあたって、とくにかれらの中心的な居住区となったパリ旧二区とその周辺に光をあてながら、この地域がどのように小説で描き出されるかをいくつかの例とともに検討した。その際に示したとおり、一八世紀後半以降、いわゆるショセーダンタン (Chaussee-d'Antin) 地区の周辺は、あらたに興隆してきた金融業者を中心に、従来の貴族階級の華やかさとは異なる新しい文化に彩られた活動拠点として成長していったのであった。

本稿では、このあたり事情をもう少し仔細に考証するとともに、近代的銀行家の原型ともいえるジャン＝フレデリック・ペレグー (Jean-Frédéric Perregaux 一七四四～一八〇八)^②を中心に、現実の銀行家の肖像がどのようなものであったかについて明確にしておきたい。

革命から第一帝政時代の金融界とその周辺

——一九世紀前半における「銀行家」の社会的地位と文学空間(二)—— (柏木)

金融関係者たちの居住区

一八世紀末から一九世紀初頭にかけて、すなわち執政政府から第一帝政の初期において、すでに政府はパリという都市の経済活動と納税者の実態をそれなりに把握していたが、一八〇七年以降、土地登記にいっそう正確さを期し、細かな土地区画と収入を知ろうと試みるようになった。というのも、一七九一年に完成していたかの有名なヴェルニケの地図でさえ、革命の動乱による破壊と再建によって、かなり実態とのずれが生じており、いくつかの尺度や計測上のちがいもあって、もはや現実の用途に合わなくなっていたからである。地図の作成には、街の空間把握（位置や道程を示す機能）、戦略上の必要など、さまざまな目的があるが、近代国家の統治機能が発達するにしたがって重要になってきたのが徴税を目的とした用途である。このためにはきわめて正確な地図が不可欠であった。

第一帝政期に、メートルの基準策定に一役買ったことでも有名なジャン＝バティスト・ドランブル (Jean-Baptiste Delambre 一七四九～一八二二) が中心となり、測量士や徴税責任者の力を結集して、街区ごとに首都にあるすべての家々をその並びどおりに見えるような地図製作の指針を出す。任務をまかされたのはフィリベール・ヴァスロ (Philibert Vasserot 一七三三～一八四〇) であった。一八一〇年に開始され、一八三六年に一応の完成を見るが、その後も息子たちの手によって改良を加えられていった。徴税を目的とした地図作成のもっとも古い例である⁽⁴⁾。

小区画ごとに正確に測量され、全体で九二二の区画が二四枚の地図にまとめられ、これがひとつに綴じられたかたちで現在国立文書館 (Archives Nationales) に保管されている⁽⁵⁾。ちなみに、仕事の陰に隠れてこの人物本人への関心がほとんど払われなかったためか、*«P.»* もしくは *«Ph.»* と省略表記されることの多かったかれの名前「フィリベール」が「フィリップ」(Philippe) と誤記されることも少なくなかったようだ⁽⁶⁾。いずれにせよ、この事業は、現在の

二〇区制になる以前のパリを知るのに不可欠の仕事である。

ナポレオン時代には革命によって崩壊した旧制度の徴税体制に代わるあらたな組織づくりが急務であった。すでに革命以前から徴税を請負人 (fermier general) によって行う制度に多くの欠陥が指摘され、その改革が目指されていたのであるから、革命後、徴税機構の刷新が官僚制度の近代化とともに求められたのは当然である。精緻な税務調査とともに進められたこの地図作成の大事業はその過程で、不動産所有者のみならず、実際の居住者、その職業、建物の占有部分、さらにはその家賃にいたるまで、じつに詳細に情報をもたらすものであった^⑦。

区と街区	500フランの営業許可税を払っている銀行家数
第1区 (計)	10
チュイルリ	0
シャン＝ゼリゼ	0
ヴァンドーム広場	10
ルール	0
第2区 (計)	25
ル・プルティエ	3
フォーブル・モンマルトル	4
ビュット・デ・ムラン	0
モン＝ブラン	18
第3区 (計)	18
ブリュテュス	4
マイユ	6
コントラ・ソシアル	2
ボワソニエール	6
総計	53

地区ごとの営業許可税を払っている銀行家の数

このような地図に加えて、選挙制度の整備とともに作成された有権者リストによっても、ナポレオン時代の経済的エリートがどのような地域に多かつたかを教えてくれる。こうした資料をもとに、たとえば銀行家たちがどの地域に居住していたかも具体的に把握することができるのである。すでに見たように、ナポレオン時代の経済的選良はもっぱらセーヌ右岸の「美しい地区」^{ポイ・カルティエ}に住んだ。税からみると、一八一〇年に五〇〇フランの営業許可税を課税されている銀行家の数は六五で、その約五分の四にあたる五三が旧一区、二区、三区に居を定めていた。街区もあわせてまとめると上表のとおりである^⑧。

この表が示すとおり、主要な銀行家が集中していたのは、一区から三区のなかでもとくに二区が多く、さらにそのなかでもモンブラン（のちのショセーダンタン）に集中していることがわかる。前稿で示したように、この地区にはネットケルやペレゴールなど、当時の主要な銀行家が居を構え、華やかな新興開発地の象徴であった。

もつとも、一八世紀末から一九世紀はじめにかけて金融関係者の経済基盤はこのように拡大し、その後の産業社会の進展とともにその傾向はますます顕著になっていくものの、不動産税額でみるかぎり、上位はなお旧貴族であることにも留意しておきたい。⁹⁾

「銀行家」とは何か

では、これら金融関係者はどのような業務に携わっていたのだろうか。一口に「銀行家」といっても、その内実は今日とはかなり異なるところがある。ここで、革命期からナポレオン時代にかけてとくに政治と深く関係をもっていた金融関係者を中心に、その事業を概観しておこう。

旧体制下の銀行家の業務にはいくつかの種類あった。まず、もつとも単純な業務としては、顧客の為替手形に支払いをする仕事がある。この時代の為替手形は一種の小切手のようなもので、革命直前の一七八〇年代から急速に発展を遂げた。現金を運ぶことなく資金を流通させうるからである。もちろんこうしたシステムは遠い昔からあるが、一八世紀後半以降、ヨーロッパの経済規模は飛躍的に拡大し、産業革命の上げ潮に乗って国際的な資金流動の必要性は高まる一方であった。これを仲介するのが銀行家である。かれらにとつてこの業務がうみだす利益はそれほど大きくはなかったものの、日常的に手っ取り早く収入を得る手立てであったことは否定できない。このタイプの銀行業として有名なのが、パリでもっとも古いマレ兄弟 (Freres Mallet) の銀行だろう。¹⁰⁾

この日常業務以外にどの銀行も商業活動を行っているのがふつうだった。この時代にはまだこのこちらのほうが主で、手形の支払などの銀行業務は顧客への便宜を図る程度のものでして行っていた業者も少なくなく、重きの置きかたにちがいはあるにしても、いずれの金融家も商取引を兼業していた。¹¹⁾ 過去をたどれば、フォンテーヌブローの勅令によって信教の自由を奪われ、スイスに逃れたユグノーの家系であるジャックルイ・プルタレス (Jacques-Louis Pourtales 一七二二—一八一二)¹²⁾ も、インド更紗やのちにインド紅茶を取引して富を築きつつ銀行業を営んだし、フランス銀行の設立者のひとりとなるジャン＝バルテルミー・ル・クトゥー・ド・カントルー (Jean-Barthélemy Le Couteux de Cantelou 一七四九—一八一八) の祖先も新大陸とのラシヤ取引と並行して銀行業を拡大していった。ドフィネ地方でインド更紗の生産から金融業に手を染めていったペリエー族 (Les Perier) も同様である。このように、旧体制下の金融業者の多くは国際的な資本移動の仲介業者として発展していくいわゆるマーチャント・バンカーであり、かれらのもつ国際的なネットワークは経済のみならず政治的な情報も逸早く伝達する機能をもっていた。それゆえ、各国の政情を窺いながら自身に利する手を打つという、いわば投機的な意図を実現するという点でもすぐれた組織を形成していたのである。

おそらくこうした投機的側面をいっそうはつきりさせたのが革命であろう。教会や亡命貴族から国家によって没収された土地や資産をもとにさまざまな投機がなされ、そのなかにはのちにロワールの古城ヴィランドリー城 (Château de Vallandry) の所有者となるアングェルロ (Hauguerlot) 家¹³⁾ や、この城の前の所有者であったウーヴラー (Gabriel-Julien Ouvrard 一七七〇—一八四六) もいた。後者もまた土地の投機によって蓄財を図った銀行家のひとりである。ペリエー家ものちにセルネー侯から得たアンザン炭田に手を出している。総裁政府時代に「メルヴェイユーズ」として有名だったフォルユネ・アムラン (Fortunée-Hannelin 一七七六—一八五一) の夫の一族も同様に投

機によって頭角をあらわした。かれらはごく短いあいだに巨万の富を得た銀行家であった。

一方、この時期に武器の調達によって莫大な財をなす銀行家もいた。さきのウーヴラールがその代表格だが、ジャン・ピエール・コロ (Jean Pierre Collet 一七七四—一八五二) なども同類である。¹⁵ 革命の動乱期から総裁政府の時代にかけて、フランスが直面した相次ぐ戦争は、一部の銀行家にとって結果的に短期間で富を確立するこのうえない機会になったのである。

革命期の銀行家が財をなす手段として、一般国民向けの物資調達もあった。主なものは小麦で、革命政府はあらゆるルートを使ってヨーロッパ中から民衆の食糧を掻き集める努力をするのだが、この仲介にあたった業者のなかには当然のことながら金融関係者もいた。もともと、この調達で政府が払う手数料は少額で、しかもアッシニャ紙幣に対する懸念から積極的に関わるまいとする業者も少なくなかった。実際、政府に協力しない科で一時的に投獄されたり罰金を喰らったりしたのもいたのである。そこで為替レートを巧妙にいじって儲けを得ようとしたりもしたが、結局、一七九五年にアッシニャ紙幣の相場が名目価値の三パーセントにまで下落し、多くの業者が破産の憂き目にあつた。さらに二年後のラメル法が追い打ちをかける。いわゆる三分の二破産法の制定である。総裁政府の財政は、増税かデフォルトかの二者択一しかない状態にまで落ち込んでいた。こうした状況のなか、政府は財源の確保を、一方でネーデルラント、北イタリアなど戦地での賠償金にもとめ、これを国庫に入れた。他方で制定したのがこの三分の二破産法で、「永久債と終身年金の三分の二をヴァウチャーで支払い、三分の一を国債に整理して、元利金を将来正貨で支払うことにした」¹⁶。とはいうものの、三分の二の部分のヴァウチャーでの支払いは、市場価格の三パーセントにも満たなかったため、実質上債務の切り捨てにほかならなかったのである。¹⁶

一九世紀の文学はさまざまなかたちで銀行家や実業家と権力の関係を描くことになるが、それはまさに革命からナ

ポレオンの時代にかけて、金融に関わるものたちがこのように政府と密な関係をもつようになったからである。いつの世も先立つものは金であり、金を動かせるものは時の権力者と結び合い、巨万の富を蓄積することも珍しくない。やや時代を遡れば、「ヨーロッパでもっとも著名でもっとも裕福な銀行家」⁽¹⁷⁾とサンシモン公爵にいわせたサミュエル・ベルナル (Samuel Bernard 一六五二—一七三九) は、旧体制下でのそうした金融家の典型的な存在であった。この人物はパリでもっとも壮麗な住居をもち、いくつも続くサロンは金箔で装飾され、鏡が燭台の光を反射させて眩いばかりに輝いていた。一年の食費は十五万リーヴルをくだらなかつたともいわれ、その豪華な生活ぶりは後世にも語り継がれている。⁽¹⁸⁾バルザックが引き合いに出しているように、まさしく「ルクツルスの享楽」にも比肩するもの⁽¹⁹⁾だったのである。

しかし、一八世紀後半以降、政府が必要に迫られて銀行家や貿易取引商^{ネゴシアン}を兼ねたような金融家たちを積極的に抱き込むようになる。革命政府時代もそうで、一見奇妙にもみえるが、ジャコバン派の政治でさえ銀行家の支えがなければ成り立たなかつた。この時代の銀行家をベルナルに擬えるのは無謀だとしても、この混乱のなかでもっとも艶やかな生活をし、陰の権勢を誇っていたのは銀行家であり、物質や武器を調達できる大商人たちであった。文学において描かれる近代的銀行家のある種の定型ができあがったのはおそらくこの時期であろう。一九世紀にはいつて、ほとんどの実業家が銀行業にも進出していくことになるから、いうまでもなくそのイメージは固定化しつつさらに膨れ上がっていくことになる。

ジャンフレデリック・ペレゴの周辺

さて、こうした銀行家像の原型をつくるのにもっとも貢献したのは、前稿でも触れたジャンフレデリック・ペレ

革命から第一帝政時代の金融界とその周辺

——一九世紀前半における「銀行家」の社会的地位と文学空間(二)——(柏木)



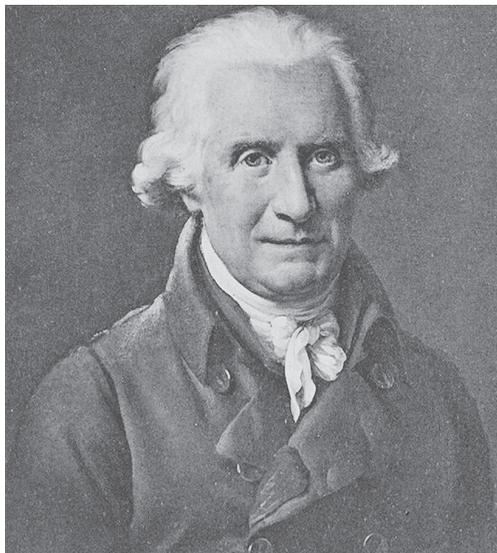
「悪習の風車を守ろうとするドンキ・ホーテの行進」

(反革命軍に対するカリカチュアで、ドンキ・ホーテに擬せられているのはコンデ公)

ゴーである。かれは、前節で述べたような状況下で事態を静観しつつ、静かに事業を進めていた。政府が武器を購入し穀物を仕入れるための費用を拠出する銀行家のひとりであったが、このことは母国であるスイスに公然と赴く正当な口実ともなった。多くの亡命貴族やイギリス人のあいだにも顧客をもっていたかれにとって、このことは大きな利点であった。というのは、革命によって祖国を離れた貴族たちはヨーロッパのあちこちに亡命したが、多く集結したのは比較的近いニース（この時期はまだフランス領ではない）やトリノやコブレンツで、とくにヌーシャテルからそれほど遠くないコブレンツで、とくに亡命した貴族たちがコンデ公を中心にプロヴァンス伯（のちのルイ一八世）の支援のもとで反革命軍の組織化を目論んだ場所でもあり、反革命の重要な拠点のひとつであったからだ。ペレゴは秘かにかれらへの資金供給や送金も請け負っていたのである。プロヴァンス伯のためにコブレンツに二〇万フラン送金し、国王の脱出に際してもフェルセン伯からその直前に五〇万フラン、あ

とでも七〇万フラン受け取っていた。⁽²⁰⁾

このような行動は当然、危険に身をさらす。一七九三年夏、イギリス人スミス・バリーに囲われていた娼婦の家から手紙が見つかり、彼女の年金がペレゴアの銀行から支払われていたことが発覚、それがもとで九月にはモンシブラン通りの自宅が捜査を受け、封印されるにいたった。とはいえ、五千万フランを政府に貸し付けている銀行家たちを束ねて管理していたのはペレゴアの銀行であり、ペレゴアは公安委員会の後盾ともいえるべき銀行家であったから、⁽²¹⁾最終的には大禍を免れることになる。実際、革命の動乱にあっても、数多の銀行家のなかでペレゴアほどヨーロッパ



ジャン＝フレデリック・ペレゴアの肖像

中の国々と取引を続けている銀行家はなかった。一言でいうなら、革命政府の中枢と亡命貴族の中心勢力の両方を顧客とし、パリ、ジュネーヴはもちろん、ロンドン、アムステルダム、ハンブルグといったヨーロッパの大金融都市でもほとんどその信用に揺らぐところはなかったのである。

ところで、シヨセリダンタン通りは当時モンシブラン通りと呼ばれていて、スイス系の金融家たちの集まる新興居住区だったこと、さらに、ここにあったギマール邸を手に入れたのがペレゴアであったことは、前稿で述べたとおりである。旧来の地区とはちがって、ここには革命の新しい息吹を顕著に感じられる場所でもあった。ギマール嬢も一八世紀後半を彩る個性的な女性だが、そのほかにも革命期に

影響力をもった女性でこの界限に住んだ者も少なくない。「テルミドールの聖母」(Notre-Dame de Thermidor) あるいは「解放の聖母」(Notre-Dame de la Délivrance) とよばれたテレーズ・カバリュス (Thérèse Cabarrus 一七三二―一八三五)⁽²²⁾ も、この街区と関係が深い。そもそも彼女の父、フランソワ・カバリュス (François Cabarrus 一七五二―一八一〇)⁽²³⁾ もスペインの有名な銀行家で、最初の中央銀行の前身となるサン・カルロス銀行の創設者である。スペインで最初の紙幣を発行した人物であり、ジョゼフ・ボナパルト治下では財務相に任命されている。

タリアン夫人 (Madame Tallien) となつてパリのサロンで影響力をもつようになったテレーズ・カバリュスが、ナポレオンよりもウーヴラルルのような金融家を好んだのも、このような生い立ちと関係しているのかもしれない。テルミドールの反動期、「アンコワヤール」(Incroyables) を「アंकロワイヤール」ではなく、わざと「アンコワイヤール」発音するのが粋であつた⁽²⁴⁾ や「メルヴェイユーズ」(Merveilleuses) などよばれる、奇天烈な衣装を身にまとい酒落者を気取る若い男女の姿が街を闊歩したことはよく知られているが、彼女はその先頭をいくファッションリーダーのひとりであつた。そのサロンにはナポレオンの最初の妻となつたジョゼフィヌ・ド・ボーアルネ (Josephine de Beauharnais 一七六三―一八一四) や、やはり銀行家の妻となつたジュリエット・レカミエ (Juliette Récamier 一七七七―一八四九)⁽²⁵⁾ といつたこの時代を彩る女性たちが常連となつて集まつていた。

この街区は、時代の空気を先取りするような人びとが集まつていたといつてもよいだろう。レカミエ夫人もまさにそうで、それまでヴィクトワール広場のすぐ北に位置するマイユ通りの邸宅に住んでいたのだが、銀行家としての羽振りがよくなるにつれて彼女の夫はこの屋敷を窮屈に思いはじめ、自分の生活にふさわしい邸宅をもとめるようになる。そして買うことになつたのがショセリダンタン通りのネッケルの邸宅であつた。ちょうどそのころ、ネッケルは亡命者名簿からはずされ、自宅を売りに出せるような状況になつており、スタール夫人が父の代わりに売却先をさが

していたのである。ネットケル邸はペレゴアのギマール邸とも並ぶようにして位置していた。おそらくどんな銀行家でも、あらたな住まいをもとめるとすればこの街区がまず念頭に浮かんだにちがいない。夫レカミエはネットケルと関係の深い銀行家であり、以前の知り合いでもあった。この売買をきっかけにして、⁽²⁶⁾レカミエ夫人はスタール夫人と生涯の友人関係を築くことになる。この邸宅のレカミエ夫人のサロンは、一八〇八年に売却されるまでのあいだ、ヨーロッパ中の貴顕の士が足繁く通う文化的地場のひとつとなった。

この街区はまた、新しい政治を準備するという点でも歴史的な役割を果たしている。革命期の学校教育改革に大きな影響力をもった政治家、ジョゼフ・ラカナル (Joseph Lakanal 一七六二―一八四五) もシヨセリダントン通りを隔ててギマール邸とほぼ向かい合う場所に居を構えていたし、総裁政府時代に権力の中枢メンバーであったフランソワ・バルテルミー (François Barthélemy 一七四七―一八三〇) もまたこの地区に住んでいた。しかし、この街区との関係でとくに重要なのは、一般にブリュメール一八日のクーデタとよばれている政変であろう。この事件がジョゼフ・ヌ・ド・ボーアルネの邸宅で準備されたことはよく知られている。この館があったのはシャトレヌ通り (rue Chateleine) で、現在はヴィクトワール通りという名に変わっているが、シヨセリダントンを東西に横切る通りである。ポナパルトの名前とともに記憶されている事件だが、当初クーデタを画策した中心人物はシエイエス (Emmanuel-Joseph Sieyès, l'abbé Sieyès 一七四八―一八三六) であり、金銭面で支援したのはペレゴアやグルノーブル出身のクロード・ペリエ (Claude Perier 一七四二―一八〇一) などの銀行家であった。かれらは、銀行の存立を脅かしかねない政情不安と経済危機から抜けられない総裁政府に業を煮やしていたのである。

ペレゴとメセナ

ところで、当時のフランスが置かれていた状況をみると、テルミドールの反動以降、周囲の国との交戦は攻勢に転じていく。一七九三年末にはポナパルトの活躍によるトゥーロン奪還がなされ、総裁政府樹立（九五年一〇月二六日）までにプロイセン、オランダ、スペインとの講和にこぎつけていた。周囲との緊張がいくぶん緩和されてくると当然経済も動きはじめる。この時期の金融界の中心にいたのがペレゴであり、革命勃発以来、巧みな状況の見定めによってかれの銀行は繁栄を極めた。総裁政府の時代にもっとも輝きを放っていたのはかれのサロンであると言っても過言ではない。

銀行家というと一般に金融のことしか頭にないような人物として捉えがちだが、このサロンが華やかであったのは、かれ自身が演劇をはじめとする芸術や文化活動に相当な関心を寄せていたからでもある。ここでこの人物の多岐にわたる交流を詳らかにすることは避けるが、みずからの銀行を設立した当初から演劇、オペラなどの芸術にメセナの役割を進んで引き受けていたようである。おそらくこの世界の華やかな女性たちとの付き合いがそれを後押ししていたという側面もあるだろう。たとえば、この時代にその美貌で名をとどろかせたミシエル・ド・ボンヌイユ (Michelle de Bonneuil 一七四八―一八二九) との関係をもっている。ちなみにこの女性の美貌については、彼女の友人でありマリイ・アントワネットの肖像画を描いたことでも知られる女流画家ヴィジェルブラン (Marie Elisabeth-Louise Vigée Le Brun 一七五五―一八四二) にも「パリでもっとも美しい」と言わしめたほどだ。銀行業としての金融・政界の人脈に加えて、数多くの女性との関係をもとに、ヴィジェルブランといった画家からアンドレ・シェニエのような文学者にいたるまで、ペレゴはじつに幅広い交友関係を手にしていたのである。とくに劇場

関係者や踊り子たちとの関係は深かった。これは革命時代に入ってからでもそうで、著名なダンサーであったギマール嬢から邸宅を購入したのちも彼女との友人関係を持ち続けているし、当時オペラ・コミック座でオペラ歌手として名を馳せていたデュガゾン夫人 (Louise-Rosalie LeFebvre, Madame Dugazon 一七五五―一八二一) にも金を工面することがあった。当時の銀行家のなかでもっとも派手な社交生活を演出していたのはまちがいなくこの男である。

やや奇妙な人間関係を挙げておこならば、かのボーマルシェとも銀行家と武器取引商というかたちで接触があった。周知のように、ボーマルシェは多くの顔をもつ人物で、劇作が本業ではない。時計職人から「国王秘書官」や「狩猟総代官」という肩書を得、さらにはトゥーレーヌ地方のシノンの森林開発事業にまで手を伸ばしている。そのような実業家としてのボーマルシェが晩年に巻き込まれることになるのが「オランダ小銃取引事件」であり、そこで資金援助をしたのがペレゴであった。⁽²⁸⁾この事件は、ボーマルシェが革命政府の委託を受けて小銃を買い入れようとしたものの、結局、小銃はオランダの武器庫からフランスに運び込むことはできないという顛末に終わる。オランダもイギリスも、すでに敵国となっていたフランスに武器が運び込まれることを極度に恐れて警戒していたのである。イギリスから国外退去となり、大陸に戻ったボーマルシェはアントウエルペンからさまざまな策を弄するものの、そのうちフランス国内ではロベスピエールが実権を握り、革命政府に協力していたはずのボーマルシェまでもが亡命貴族のリストに載せられる。パリに残っていた家族は逮捕され監禁されてしまう。その後、テルミドールの反動とともに家族は釈放され、かれの名も亡命貴族のリストから外されてパリに帰ることができるようになるが、これもペレゴの力によるところが大きかった。⁽²⁹⁾『フィガロ』の作者とこの銀行家の関係は、イギリス人旅行作家ヘンリー・スウィンバーン (Henry Swinburne 一七四三―一八〇三) の記述にも確認できる。「ペレゴ宅で、サン・フォワ、タレラン、レドレール、ボーマルシェと食事。この最後の者はとても耳が遠いが、なお才気煥発で陽気である」⁽³⁰⁾(一七九七年二

月一九日)。

以上からも察せられるように、このスイス人銀行家にはどの方面でも厚い人望があった。同時代に銀行家は数多くいたが、ほかの銀行家とくらべて、他者への礼儀や配慮において欠けるところがなく、また、知性や当意即妙の受け答えで場を盛り上げる術にも秀でていたようだ。革命時代から第一帝政にかけては一般に芸術活動は低調であったといわれる。ベアトリス・デイデエが示したように⁽³⁾、個々にみれば優れたものもあるとはいえ、そのあとの時期に比べればやはり不振を託つほかない。しかし、そういう状況のなかでもその時々を彩る舞台芸術は継続的に受容されていた。人びとは恐怖と戦争と動乱のはざまで、利那的にはあれ、目先の淡い陶醉に身を委ねた。総裁政府の時代のメルヴェイユーズやアंकロワイヤールのごとき、なかば狂気じみた現象があちこちに発現したように、静かに時間をかけて深遠な芸術的意味を味わうよりも、その場かぎりのほかない、しかし激しい輝きを放つような瞬間こそがもとめられた。華やかな舞台上のダンスや歌がもてはやされたのもそうした理由からであろう。ペレゴが繋がりを保ち、援助を惜しまなかった人びとには、相継ぐ動乱のなかで経済的に弱い立場に置かれたこうした歌手や踊り子が多くいた。かれらに理解を示し、いわばバトロンのな存在となったのがペレゴだったのである。

テルミドールの直後は快楽を生きる狂乱の時代であった。派手な催しと装いには金が必要なのはどの時代も同じで、すでに述べたように、この時代の花であったアムラン夫人もタリアン夫人もみな銀行家と親しい関係にあるか、かなり近いところで生活していた。「テルミドールの聖母」とよばれたテレジア・カバリユスがタリアン夫人となつたのは一七九四年二月二六日だが、彼女は結婚後すぐにシャンゼリゼ界隈(現在のマティニョン通り)の「菓ぶきの家」(Chamrière)に引越す。ただちにこの場所はパリでもっとも華やかな社交サロンとなつた。同時に、パリの上流社会はこぞって当時舞踏会場になっていたロングヴィル館(Hôtel Longueville)に通つて羽目を外した。な

かでも異彩を放っていたのがアムラン夫人なのだが、そこで繰り広げられる大規模なダンスの妖艶な雰囲気をごんクール兄弟はつぎのように書いています。

香水を振ってたなびくように蠢く三百人の女たちが、ヴィーナスさながらの薄着姿で、淫らにも見せないところをすべて見えるがままにしている「……」。金色に輝く軒蛇腹（コーニス）の下でいくつもの鏡が反射して映し出しているのは、微笑みと抱き合う姿、余計なものが一掃されて体の線と大理石のような胸をくつきり際立たせている衣服、酩酊と渦巻くような人の動きのなかで開き、まるでバラのように花咲く口である。¹²⁾

このような乱痴気騒ぎにもみえるサロンでのパーティや夜会は、恐怖政治から一気に解放され弛緩した感情が奔流のように決壊して雪崩れこんだ結果である。奇天烈な風俗を生んだこの時期、人びとは異常なまでの飲食にもめり込む。「貪り食うことが流行だった」がゆえに食事のはじめに三百個の牡蠣を食べていたジュノ將軍や、友人を招いて薄絹しかまとつていない美女たちに給仕をさせていたタレランなど、この時代のエピソードは事欠かない。そのような場にあらわれていたのがタリアン夫人であり、アムラン夫人であり、またレカミエ夫人であり、アンゲル口夫人であり、ときにスタール夫人の姿もあった。そしてその中心でこうした人びとに経済的支えとなっていたのもやはり銀行家ペレゴードだったのである。

総裁政府時代においてもペレゴードがいかにその中枢と結びついていたかは、たとえばボナパルトがイタリア遠征でみずからの副官として重用し、華々しい功績を挙げたオーギュスト・マルモン (Auguste Frédéric Louis Viesse de Marmont 一七七四～一八五二)¹⁴⁾を讃えて、敵から奪った二二本の旗を政府に奉納する儀式を挙行するさい、それが

ペレゴアの自宅で催されたという事実からも察することができよう。一七九六年一〇月一日、マルモンは陸軍大臣ペティエの馬車に乗って到着、そのあとに二二名の駐留将校が戦利品を携えて続いた。ボナパルトがイタリア遠征軍の輝かしい偉勳について、「みなさんにお示しする二二本の旗は、この成功の明快な証言であります。「中略」(イタリア遠征軍の)この勝利は、総裁のみなさん、共和国に対する絶えざる愛の確かな証拠です。「中略」この軍を自由のもっとも揺るぎない支えのひとつとみなしていただきたい、そして軍を構成する兵士がいるかぎり、政府は怖れを知らぬ護り手をもっているのだと思つていただきたいのです。」と述べ、筆頭総裁であったラールヴェリエール・レポーがそれに答えるというかたちで式典は進んだ。⁽³⁵⁾ マルモンはこの時に出会つたペレゴアの娘をのちに妻とするのだが、ペレゴアの手に渡つたギマル邸は、このような政治的なシヨールでもその力を發揮していたのである。

ペレゴアとフランス銀行

のちにティエールは『執政政府および帝政時代の歴史』のなかで、フランス銀行の設立に関して以下のように書く。

政府は首都の主要な銀行家を煽り、当時、国家への大きな貢献すべてにその名が結びつけられる金融家ペレゴアがそのトップに就き、国家の銀行の創設のために富裕な資本家の集団をつくつた。この銀行はフランス銀行とよばれ、今日あるものと同じである。⁽³⁶⁾

この記述にもあきらかなように、当時ペレゴアへの信頼は絶大であった。ブリュメール一八日のクーデタのあと、ボナパルトはかれを最初の護憲元老院 (senateur conservateur)⁽³⁷⁾ の議員に任命しているが、このとき元老院議員に任命

された銀行家はかれをおいて他にいない。総裁政府時代の末期、フランスの財政はほとんど破綻していて、執政政府の急務は金融・財政の立て直しであった。第一執政のボナパルトは、ゴードン(Martin-Michel-Charles Gaudin 一七五六―一八四二)、モリアン(Nicolas François, comte Mollien 一七五八―一八五〇)、バルベ＝マルボワ(François Barbé-Marbois 一七四五―一八三七)、ルブラン(Charles-François Lebrun 一七三九―一八二四)、クレテ(Emmanuelle Créret 一七四七―一八〇九)、そしてペレゴールで周囲を固め、フランス銀行の創設にあたったのである。

こうしてペレゴールの奔走によって共和暦八年雪月二八日、すなわち一八〇〇年一月一日に設立へと漕ぎつけるフランス銀行は、有力銀行家らでつくるいわば私設銀行であり、ペレゴール、マレ、ペリエ、ル・クトゥール＝カントルールが、当時元老会(Conseil des Anciens)の一員であったクレテの賛同を得て、財務大臣ゴードンに建白した案がもとになっている。同年二月一三日に第一回の株主総会を開き、定款および理事(Regent)の任命が承認され、ペレゴールはもちろん、マレヤル・クトゥール＝カントルール、ペリエらとともにそこに名を連ねていた。

ジャコバン派が優勢をたもっていた時代を含め、フランス革命から第一帝政にかけて、いかに銀行家たちが政治の中枢を動かしていたかは、繰り返して述べてきたとおりである。この時代は対外的にみれば戦争の連続であり、戦費捻出が最重要課題であった、したがって、革命の混乱のなかで政府の財政機関がまだかたちを整えていないとき、銀行家や実業家たちの力がなければ国内の財政も国際的な資金供給もおぼつかなかったといつてよい。そのなかでペレゴールほどあらゆる業界に広くかつ深い人間関係を築いていた金融家はいない。フランスのみならずイギリスの貴族階級、そして芸術家の有名どころとの付き合いも最後まで続く。

死の数年前から体調が思わしくなかったかれは、転地療養を兼ねて前世紀末に購入していたヴィリー＝シャティヨ

ンの城館と故郷スイスのヌーシャテルを往き来していたが、一八〇八年二月一七日、ヴィリーニャティヨンで没した。二月二二日、葬儀が挙行されてパンテオンに葬られる。ちなみに一七九一年にフランスの偉人を葬る施設となつたパンテオンには、ヴォルテールやジャンジャック・ルソー以来、今日まで七四名（男性七〇、女性四）が迎え入れられているが、ほとんどは政治家、軍人、科学者・著述家であり、銀行家はペレゴ以外には存在しない。ここからみても、革命期から第一帝政期にかけてペレゴという人物がもつていた影響力の大きさを想像することができる。実際、かれの葬儀には多くの人々が繰り出した。葬儀の翌日の新聞はそのことを物語っている。

元老院議員ペレゴの葬儀は本日、元老院議員の身分ならではの荘厳さをもつて挙行された。私人としての人間関係も手伝つて葬列が大きくなり、モンブラン通りからパンテオンまで向かうのに市全体を横断することになった。⁴⁰

ペレゴの人脈がこれほどまでに広く、またそれがある種の信頼のうえに築かれていたのは、たんに「金」による人間関係ではなかつたことを示している。そしてその信頼を支えていたのは、この銀行家が抱いていた貴族的身分への憧れであつたように思われる。当時、旧貴族がメンバーに名を連ねていた元老院に加わることはかれにとってのうえない名譽であつたろう。しかも一八〇〇年九月一日（共和暦八年実月一日）から元老院らしい風格と威厳にみちた服装が定められたから、銀行家はそれを身につけてますます貴族に近づいた思いを強くしたにちがいない。かれにはこのような貴族的気風を推重する氣質があつた。最期を迎えることになつたヴィリーニャティヨンの城館も、ルイ一五世のもとで警察長官を、さらにルイ一六世のもとで海軍相を務めた貴族アントワーヌ・ド・サルティエヌ

(Antoine de Sartine 一七二九—一八〇一) から買い入れたものであり、かつて一七世紀にはシャルル・ペローの兄ピエール・ペロー (Pierre Perrault 一六一一—一八〇) が所有していたこともある由緒あるものであった。マルモンに嫁がせることになる娘オルタンスもカンパン夫人 (Henriette Campan 一七五二—一八二二) のもとにあずけて教育を受けさせている。知られているように、マリイ・アントワネットの首席侍女であった夫人はテルミドールの政変ののち、バリ郊外サン＝ジェルマン＝アン＝レーに良家の女子を教育する寄宿学校を開設し、のちにナポレオンとジョゼフィーヌの間に生まれた娘、のちのオランダ王妃となるオルタンス・ド・ボーアルネ (Hortense de Beauharnais 一七八三—一八三七) をはじめ、ナポレオンの親族の娘たちを受け入れていた。ペレゴの娘もここで多くの貴族や上層ブルジョワ階級の娘たちと交友関係をつくったのである。⁽⁴⁾ 上流社会の空気のなかに身を置きたいという願望は、娘の教育にも反映されていたのであろう。おそらく同じ思いがかれのメセナのような振舞いも支えていたにちがいない。そしてこのような態度がかれの右腕となっていたラフィットとの確執を生む原因のひとつになったとも考えられる。とくに一八〇四年にレジオン・ドヌール受勲者となつて以降、ますます名誉や周囲からの尊敬を気にかけるようになったようで、ラフィットからすれば、そのために事業の拡大の好機を開放しているかにみえることも多かった。⁽⁵⁾ 銀行家であることに對するある種の引け目を感じていたということかもしれない。

いずれにしても、貴族が所有していた城館の購入、娘の教育環境、元老院議員の地位、レジオン・ドヌール勲章など、いずれをとつても上流社会との結びつきに必要な要素であり、ペレゴの芸術家たちへの後見人的振舞いもまた、かれ自身の貴族に對する階級的羨望が背景にあつたと考えることができるといえる。どの時代においてもそうだが、市民階級の上昇の時代であればこそ、高尚な趣味や文芸・芸術が「わかる」というのはそれまで以上に社会的卓越性の指標となつた。芸術の理解は精神的活動だが、庇護活動 (メセナ) はそれを目にみえるかたちで表出する手段となる。ペレ

ゴーの援助活動には、もちろん女性好きというかれ自身の性癖もあったであろうが（対象が女性である場合が多い）、それ以上に文化的差異化を志向するところがあつたように思われる。

（以下次稿）

註

- (1) 拙稿「一九世紀前半における「銀行家」の社会的地位と文学空間（一）」、『文學論集』關西大学文学会、第六七卷第三号所収（一頁三〇頁）
- (2) 綴字どおりに読めば「ベルゴー」となるが、Perregauxと綴られることもあるので、ここでは「ペレゴー」とする。
- (3) エドム・ヴェルニケ (Edme Verinquet 一七二七—一八〇四) は、シャティヨン＝シュル＝セーヌの国王付土地測量士であつた父のもとに生まれ、かれ自身も測量士、建築家となつて、父の死後、その仕事を受け継いだが、一七七二年以降、パリに移り住み、ビュフォンのもとで王立薬草園の改造を手助けた。多くの仕事を残しているが、なかでも晩年のほとんどを費やして作成されたパリの市街地図がもっとも有名であらう。
- (4) フィリベール・ヴァスロにのこつてはCécile Souchon. * Philibert Vasserot et les atlas des quartiers de Paris. * *Bulletin du Comité Français de Cartographie*, n° 171, Mars 2002, pp. 37-41 が詳し。
- (5) Archives Nationales, Cartes et plans, F/31/73-96. パリ国立図書館 (BNF) にも一部所蔵されているが、こちらはやや仕上げが粗く不均質である。
- (6) Cécile Souchon, *op. cit.*, p. 37.
- (7) これより前、一八〇〇年に「パリ地域家主名簿」が作成されているが、職業までは記されていない。Cf. Archives Nationales, AP^{IV}, 441-443. じつはそれ以前にもこのような意図はあつたが、革命の嵐のなか、不安定な政権のもとでこのような名簿を作るたびに「追放者名簿」に変わるの危険があつた。したがつて、なかなか実現しなかつたのである。ナポレオン政権になつてようやくそのような危険は去つた。
- (8) この表はルイ・ベルジュロンの調査によつてゐる。Cf. Louis Bergeron, *Banquiers, négociants et manufacturiers parisiens du*

- (9) *Ibid.*, pp. 21.
- (10) から一族もまたジュネーヴで銀行業を開始した。もとはフランスのルーアンの出で、プロテスタントであったがために一六世紀半ばにスイスに逃れた。この子孫たちがジュネーヴで地盤を築き、ジャック・マレ (Jacques Mallet 一六四四―一七〇八) が金融業をはじめ、その子どもであるジエデオン・マレ (Gedeon Mallet 一六六六―一七五〇) が正式に銀行を設立する。そこからパリに送られたのが親戚筋のイサック・マレ (Issac Mallet) だ。一七二三年、パリにマレ銀行を創設することになる。
- (11) 二で商業活動と語っているのは、フランス語では「*négoce*」という言葉で表現されていたものである。この語は「*commerce*」という語が優勢になったために、ほとんど使われなくなったが、この時代「*négoçant*と*banquier*は多くの場合兼業されていたため、その区別はかならずしも明確ではなかった。
- (12) フランス中南部セヴェンヌ地方のユグノーであった父の代にヌーシャテルに逃れてきた一家。そこでインド更紗の事業を始めた父の仕事を受け継ぎつつ、ジャック・ルイは銀行業にも手を染める。
- (13) アンゲルロ一族がこの古城を買ったのはやはり金融業で財を成していたかのガブリエル・ジュリアン・ウーヴラルからであった。ちょうどウーヴラル (一七七〇―一八四六) は資産を不動産に投資しようとしていた時期であり、金銭的に行き詰まっていたナントの奴隷商人フランソワ・シエネ (François Chénais) から競売にかけられていたものを買ったのであった (ウーヴラル自身も植民地貿易を大規模に展開している)。ウーヴラルはこれ以外にも、アゼ・ル・リドー (Azay-le-Rideau)、『マルリー (Marty)』、ルーヴシエンヌ (Louvciennes) といった城館を亡命貴族たちから手に入れている。なお、ナポレオンの手を介してアンゲルロ一家に渡ったのは一八一〇年のことである。
- (14) Louis Bergeron, *op. cit.*, pp. 152-158.
- (15) 富田俊基「国債の歴史 金利に凝縮された過去と未来」東洋経済新報社、二〇〇六年、一四三頁。
- (16) ちなみに、フランス語では俗に「慰めの三分の一」(Tiers consolide) とよばれるこの三分の一に整理された国債は、結局のところ払い戻されずじまいに終わるが、その後の定型となる「年五パーセントの年金 (rente)」をうむことになる。
- (17) Saint-Simon, *Mémoires*, éd. par Yves Coirault, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », t. II, 1983, p. 705.
- (18) Elisabeth de Clermont-Tonnerre, *Histoire de Samuel Bernard et de ses enfants*, Édouard Champion, 1914, p. 77.

- (19) Honoré de Balzac, *Louis Lambert*, in *La Comédie humaine* XI, éd. de Pierre-Georges Castex, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1980, p. 650.
- (20) Olivier Blanc, *Les espions de la Révolution et de l'Empire*, Perrin, 1995, pp. 146-148, 169, 211.
- (21) 実際、国内外でアッシンニャ紙幣の偽造者を特定する役割で託されたし、公安委員会が組織されたときには「公安委員会付銀行家」(banquier du Comité de Salut public) という意味ありげな肩書を得た。Cf. Jean Lhommer, *Perregaux et sa fille la duchesse de Raguse*, Paris, Imprimerie Générale Lahure, 1905, p. 21.
- (22) スペイン人のためテレサ、テレジアなどと表記されることもある。テルミドールのクーデタを起こさせるきっかけのひとつをつくったのも彼女であった。恐怖政治の犠牲になっていく身近なものを救ったかどで自身も囚われの身となっていたとき、タリアンに手紙を送り、かれを奮起させてクーデタを起す決心をさせたのである。「テルミドールの聖母」とよばれるようになった所以である。
- (23) フランス・バイヨンヌ地方の生まれで、のちにスペイン国籍となった。スペインではフランシスコ・デ・カバルス (Francisco de Cabarrús) と発音される。ウヤがこの人物の肖像画を描いている。
- (24) Alain Rey (sous la dir. de), *Dictionnaire culturel en langue française*, Le Robert, 2005, t. II, p. 1915.
- (25) 彼女たちもまた、当時の流行の先端をゆく女性たちで、そのサロンには多くの文人や政治家が参集したことはよく知られている。
- (26) 売買契約の日付は共和暦七年葡萄月二五日、すなわち一七九八年一〇月一六日となっている。
- (27) 工藤庸子『評伝 スタール夫人と近代ヨーロッパ フランス革命とナポレオン独裁を生きぬいた自由主義の母』東京大学出版会、二〇一六年、二七二頁。
- (28) この事件を簡単にまとめれば、ポーマルシェはブリュッセルの商人ドラエーから得た小銃をフランス革命政府に売る契約を結ぶことになるが(一七九二年四月三日)、いつまでも政府はこれを履行しなかつたために、かれは買い戻し可能という条件を付けてイギリス人仲買人に売った。しかし結局のところ、革命で武器が必要なフランス公安委員会の意を受けてこの武器の取得に再び乗り出すことになったポーマルシェはそのための資金を銀行から借りる。その相手がペレゴであった。Cf. Jean Lhommer, *op. cit.*, p. 21. なお、この事件については鈴木康司の『闘うファイガロ ポーマルシェ一代記』(大修館書店、一九九七年)に詳述されている(二一八四―三〇〇頁)が、ペレゴの名は出てこない。「スイスの銀行家」とのみ言及されているのがペレゴである(二一九六頁)。

- (29) Jean Lhommer, *op. cit.*, p. 47. 鈴木康司、前掲書、二九六—二九八頁参照。
- (30) Jean Lhommer, *loc. cit.*
- (31) Cf. Béatrice Didier, *La Littérature de la Révolution française*, PUF, coll. « Que sais-je? », 1988.
- (32) Edmond et Jules de Goncourt, *Histoire de la Société française pendant le Directoire*, G. Charpentier, 1892, pp. 143-144.
- (33) Joseph Turquan, *La générale Junot. La Duchesse d'Abrantes (1784-1838)*, Jules Tallandier, 1914, pp. 61-62.
- (34) よく知られてゐるように、一八一四年、ロシア遠征の失敗のあとナポレオンを取り巻く情勢がさらに悪化してもはや絶望的な状況となった時、マルモンは寝返り、ナポレオンを無条件降伏へと追い込むことになる。
- (35) A. Lievyns, Jean Maurice Verdot, Pierre Bégar, *Fastes de la Légion-d'honneur : biographie de tous les décorés*, t. II, Paris, Bureau de l'Administration, 1942, p. 378.
- (36) Adolphe Thiers, *Histoire du consulat et de l'Empire*, t. I, Bruxelles, Prodhomme, 1845, p. 108.
- (37) 執政政府の枠組みを決定する共和暦八年の憲法によって創設され、法制審議院 (Tribunat)、立法院 (Corps législatif) とあわせて三院をなす。
- (38) フランス銀行は発券銀行ではあったが、国立銀行となるのは戦後のことである。
- (39) これまでに「パンテオン入り」(pantheonisation) が決定されたのは八一名にのほろが、その後他所に移されたもの (ミラボーやマラー)、実際に遺灰移転がなされなかったものなどがあり、墓(または遺灰壺) が確認できるのは七四名。これ以外に、科学者のベルトレの妻、本年(二〇一八年)に新たに葬られた政治家シモーヌ・ヴェイユの夫のように、対象者と同葬された配偶者もいる。なお、パンテオンの歴史の意味については、Mona Ozouf, « Le Panthéon », in *Les lieux de mémoire*, t. I, « La République », Gallimard, 1984 を参照。
- (40) *Courrier de l'Europe et des spectacles*, 23 février 1808.
- (41) 一七九九年二月二四日(共和暦八年雪月三日)の法令によって、護憲元老院は「会議の威厳に必要な」ものとして、議員、使者、守衛の正式な服装を定めるとし(第一条)、一八〇〇年九月一日(共和暦八年実月一日)にそれを具体的に発表した。「盛装はコーンフラワーブルー(矢車菊の花のような濃い青)のラシヤで金の刺繍入り、ボタンにも刺繍が施されたフランス式燕尾服で、同様の小さな刺繍の入った白の綾織りの上着または胴着、そして燕尾服と同じ意匠のキュロットでガーターと刺繍入りのボタンのついた

たものからなっている。そこに刺繍入りで金色のフリンジつきの白い絹のスカーフ、飾り紐と金色のボタンのついた帽子が加わる。簡易服は、おなじような青いラシヤの襟つき礼服で、金色の縁取り、折り返しがあり、ボタンには刺繍が施されている。「*Gazette nationale ou Le Moniteur universel*, n.° 345, * Extrait des registres du sénat conservateur », 15 fructidor an VIII.」の衣装は、ナポレオンの戴冠を前にさらに豪華になり、白いサテンで裏打ちされたピロードのマント、レースのネクタイ、帽子には白い羽根、そして金色の鞞に収まる刀剣がつくことになった。Cf. C. L. Gillet, *Dictionnaire des constitutions de l'Empire français et du royaume d'Italie*, Imprimerie de J. Gratiot, 1806, p. 329.

(42) Jean Lhommer, *op. cit.*, p. 51.

(43) Virginie Monier, *Jacques Laffitte. Roi des banquiers et banquier des rois*, P. I. E. Peter Lang, 2013, p. 66.